

レポート作成について(作成要領)(国際文化人間論)

1. ワードプロ(Word)で作成する場合

- ・ フォント：MS 明朝；フォントサイズ：11 ポイント
- ・ 1 行の文字数：40 字；1 ページの行数：36 行
- ・ 用紙サイズ：A4（横書き）
- ・ 余白：上（35 mm）、下（30 mm）、左（30 mm）、右（30 mm）

但し、手書きで作成する場合

- ・ 400 字詰め A4 原稿用紙（横書き）を使用すること。

2. レポートの字数制限とページ数の上限について

- ・ 表題、提出者氏名、所属学科及び学年を除き、本文は最大 3,000 字とする。図や表を含めてワードプロ作成の場合は、5 ページ、手書きの場合は 10 ページまで。

3. レポート作成の詳細

- ・ 次ページに示す例を参照のこと。

4. レポートの評価

- ・ 評価の観点（各観点の配点：20 点）
 - ① 1～3 に示した作成要領に沿って作成されている。
 - ② 問いへの解答の導き出し方が適切である。
 - ③ 論理展開の筋道を辿ることができる（一貫している）。
 - ④ 論旨（論じていること）が明確である。
 - ⑤ 論じている内容が妥当である。

<レポート作成の詳細:参考例を示す>

表題：国際人とは、どういう人か（主題）？－中濱万次郎を事例として（副題）

<1行あける>

レポート提出者氏名（学籍番号）

所属学科・学年

<1行あけて本文を書き始める：本文の構成は以下に示す通りです>

1. 序論（問いと問いを設定した理由）

2. 解答へのアプローチ

問いへの解答をどうやって導き出したか:使った参考資料やインターネットからの情報を踏まえながら説明する。

3. 結果

2で説明した資料や情報と関連させながら問いに対する解答について述べる。

4. 考察

解答が妥当であることを論じる。

5. 結論

レポート全体の内容を総括して、解答に関する自分の考えを述べ、レポートを締めくくる。

6. 参考資料/文献

6. 1 参考資料/文献の示し方

- ・論文の場合：著者名（二人の場合は、A 及び B、三人以上の場合も A、B、C 及び D）
発行年（西暦）「表題」、掲載されている学術雑誌名（斜字体）、巻数、号数、最初と最後のページ数
 - ・近森憲助、谷村千絵及び上野正恵（2017）「教育研究と教育実践における批判的実在論（クリティカル・リアリズム）の可能性」*教育学研究* 第 84 巻第 4 号、455－465 頁。

・書籍の場合

著者名（複数の著者がいる場合は上記と同じ）、発行年（西暦）、書籍の表題、出版社所在地：出版社名

- ・手島利夫（2017）『学校発の ESD の学び』東京：教育出版

・インターネットからの情報

情報作成・掲載者 記事など掲載物の表題、掲載されているホームページ等のアドレス（最終閲覧年月日）

総務省 (2019) 「指標仮訳」 http://www.soumu.go.jp/toukei_toukastu/index/kokusai/02toukatsu01_04000212.html (2019年10月16日最終閲覧)

6. 2 参考文献の引用の仕方 (特に本文中において)

①レポートの一部でも、コピーをしたことが発覚した場合には、不合格とします。他の人が書いた本や論文の内容を自分が考え出したものであるかのようにして発表すること (剽窃: いわゆるコピー) は許されません。

②レポートの本文中に、他の人が書いた書物、論文その他の参考資料から本文中に直接引用する場合には、下に示したように、引用部分を「」でくくり、さらに「」でくくった引用部分の末尾に引用先をページ数まで () 内に明示して、「」に示したものは、自分が考え出したものではないことを明確に示しておかなければならない。

例:

ESDについては「場所に関係を持たないが、教育は場所によって異なる文化と強く結びついている (近森 2020、スライド27)」といわれている。

なお、他の人が書物や論文、パンフレットあるいはホームページ上で述べていることを要約して示すなど、間接的な引用においても、引用先を明示しておかなければならない。

例: ESDは場所非依存的だが、教育は文化に強く依存している (近森、2020)

ちなみに、近森 (2020) を、参考資料として示す場合は下記のようなになるでしょうか。
近森憲助 (2020) 令和二年度「国際文化人間論講義資料」スライド1-27